

2019 年度事業報告書

特定非営利活動法人 パノラマ

【校内居場所カフェ事業】

高校内に居場所カフェを開き、スタッフや多様なロールモデルであるボランティアさんと、日常会話から信頼貯金を貯めつつ、将来の糧となるヒト・モノ・コトの文化資本を高校生に提供する。中退や進路未決定の予防にとどまらず、将来的な社会関係資本への接続から経済資本への獲得を見据えた事業。

連携団体：NPO 法人スペースナナ、一般社団法人お寺の未来（おてらおやつクラブ）、フードバンク各団体 他

（ ）内は 2018 年度実績

ぴっかりカフェ @神奈川県立田奈高校 実績

- ・開催数：33 回（30 回）
- ・参加生徒数：3,325 名／平均 100 名（3,710 名／平均 124 名）
- ・ボランティア参加数：述べ 250 名（232 名）

BORDER CAFÉ @神奈川県立大和東高校 実績

- ・開催数：31 回（32 回）
- ・参加生徒数：2,525 名／平均 81 名（3,068 名／平均 93 名）
- ・ボランティア参加数：述べ 100 名（171 名）

カフェ事業実績 合計

- ・開催数：64 回（62 回）
- ・参加生徒数：5,850 名（6,778 名）
- ・ボランティア参加数：述べ 350 名（403 名）

「ボランティアさん養成講座」実績

本年度は開催回数こそ少ないものの、新たに大和市社協との共同開催で実施することが可能となった。これにより地域の方々が BORDER CAFÉ にボランティア参加してくれるようになっているのは大きな成果であった。

- ・開催数：4回（6回）
- ・参加数：33名（50名）

事業総括

カフェの運営はこれまで通り安定しており、浴衣パーティーやクリスマス・パーティー、カレー・パーティーなど、学校の年中行事にほぼ組み込まれているような感じであり、学校文化に根ざすことができているように感じている。しかし、その一方で、生徒の様子は安定とは程遠いものだった、というのが本年度の両校合わせた総括になるだろう。

カフェを始めて5年になるが、年を追うごとに生徒たちの学校への“ハマれなさ”が目につくようになってきている。そんな、クラスにもグループにも、部活にも趣味にもハマれない生徒が次々と学校を辞めていく。

辞めるのは突然ではない。フェイドアウトという感じで、徐々にだ。それを阻止するための砦がクリエイティブ・スクールであり、校内居場所カフェのはずだが、辞めた生徒情報を教師からではなく、その友だちからポロっと聞き知るといった状況が度々あった。

（決して暇なわけではないが）私たちは手も足も出せず、つまり仕事させてもらえずに終わってしまったのが2019年度だったように感じる。この傾向は強まっていると感じ、強い危機感を持っている。

石井が学校運営評議会で、評議委員としてこの問題については言及してきたが、この意識を管理職とは共有できても、人事異動が多い新たらしい現場の教師たちと課題を共有し切れなかったというのが大きな反省であるが、同じ学校にいてもここにリーチすることはなかなか難しく接点を持ってない。

3月には田奈高校で教員研修の講師を務めさせていただき、恒例となっている大和東高校の新着人教員に対するレクチャー・タイムを設けていただいた。このように、私たちと教員たちとの接点＝コミュニケーションの機会をどう作るかということに尽きるが、**私たちが目指すミッションを立ち戻って考えれば、フォーマルな場を設けるだけでは不十分であり、如何に立ち話しや食事等を含むインフォーマルなコミュニケーションの機会を作っていけるかが課題**であると認識している。先生参加型、巻き込み型のイベントを活性化させたい。

私たちのようなNPOが、学校の中でどのような役割を果たせるのか、引き続きチャレンジしていきたい。

【個別相談事業～Drop-in～】

カフェで早期発見した課題を、信頼貯金を使いながらソーシャル・ワークへと発展させて

いく。教員が気づいてない世帯の課題や、発達障害等の課題を発見し、学校や SC、SSW 等の専門職と共有することで課題解決へと展開させ、中退や進路未決定を予防するとともに、中退後のサポートを可能とする基盤作りを目的とした事業。年間 80 件程度の個別相談を実施。田奈高校は北部ユースプラザの出張相談事業に位置づけ。

個別相談 Drop-in の事業総括

田奈高校の Drop-in は、担当の教師 0 先生が 2 年目となり、パノラマと各学年や担任団との連絡調整をしっかりと図って下さり、例年以上の運営ができたと感じている。しかし、カフェでの関係が 1 年生の頃からできていたにも関わらず（できていたからこそでもあるが）、3 年の卒業間近になってから面談を開始し、家庭の深刻度を改めて知ることになったケースや、CW との直接交渉ができないまま長期化していたケースが、別件で来校していた CW と偶然に話ができて進展するなど、**待ちのプル型支援だけではなく、攻めのプッシュ型の支援をしていかないと、生徒の困難を補足しきれないと痛感した年度でもあった。**両校合わせ、「居場所的プル」と「アウトリーチ的プッシュ」を上手く使い分けられるようにしていきたい。

大和東高校の Drop-in は、これまで校内での連絡体制が確立されず、ほとんど機能してない状態が続いていたが、学校運営評議会での教員へのアピールにより、年明けくらいから機能し始めた。これは、全学年がクリエイティブ生になったことで、生徒像が様変わりし、学校もいよいよ福祉的ニーズに対する支援に本腰を入れざるを得ない状況についてになったことが要因だと言えるだろう。

生徒指導数や SC への相談件数が増加傾向にあり、校内居場所カフェの事業総括で述べた背景により、既存のシステムでは対応しきれなくなっていることと、パノラマの活動がやっと校内に定着してきたことが理由だと思われる。入学前支援に対しても積極的に意見が交わされるなど、今後は楽しみなタイミングでのコロナ・ウィルス…、残念でならないが、希望の持てる 1 年の締め括りとなった。

【入学前支援（自主事業）】

合格発表から入学式までの間に、希望者に対して友達づくりワークショップやカフェ体験等のレクリエーション、インテーク面談で不安を解消し、学校や当法人との信頼関係を築いた状態で入学式を迎えてもらい、中退・進路未決定者数の減少を目指す。

入学前支援の事業総括

2年目となる本年度は、学校側の意欲も高く期待していたが、残念ながらコロナ・ウィルスの影響により両校で実施できなかった。

特に、大和東高校では意欲が高く、学校運営評議会では、教員たちとのグループ・ディスカッションの機会をいただき、運営方法について有意義な意見交換ができ、合格発表の際の配布資料内に、入学前支援のチラシを封入し、合格者説明会でのカフェ体験の告知や、QRコードから日頃のカフェの様子が見られるページに飛んでもらうなどのアイデアが出た。これらのアイデアは田奈高校にも飛び火しており、カフェ体験の盛り上がりを見込みに期待していただけに、実施できず残念でならない。

【居場所居酒屋汽水】(NPO 法人スペースナナ協働事業)

「支援しない支援」つまりゴール設定をしない非支援を掲げ、既存の発想の若者支援ではリーチできていない、ひきこもり等の若者・中高年へ、居酒屋というフォーマットのサードプレイスを提供。支援者以外の地域の大人たちを巻き込み「役割のシャッフル」を起こすことで社会的孤立を防ぎ、QOLを上げることで自立可能性を高める。また、必要であればしかるべき支援機関を紹介する。8050 問題等、中高年ひきこもり支援の新たな切り口としての可能性を模索する事業。

() は前年度

居場所居酒屋「汽水」事業実績

開催数：11 回 (12 回)

参加者数：159 人 / 平均 14 人 (105 名 / 9 人)

スタッフ：毎回 6~7 名 (参加者数に含む)

汽水事業の総括

2019 年度の汽水是、北部ユースプラザの事業開始及び、NPO 法人パノラマへのメンバー (利用者) たちとの信頼関係の構築に伴い、ユースプラザのメンバーが、タツノコとして参加が急増し、タツノコ 47 名中、ユースプラ・メンバーは 37 名となっている。

また、多くのメンバーたちが、15 時頃からスペースナナに集まり、料理作りをナナさんたちと一緒に楽しむという参加の仕方をしているし、中には、ナナで行われている手仕事カフェ (お裁縫等) から参加しているメンバーさんもあり、スペースナナとは、より深い、協働事業に成長している。

反省点としては、飲み過ぎてしまった女性タツノコが、駅のトイレから出てこれなくなり、スペースナナの山下さんがタクシーで家まで送るといったことがあった。本人は家の住所も言えないくらいに酔っていたとのこと。この経験を踏まえ、ドラゴンは不用意にタツノコにお酒を進めないことや、飲み過ぎる傾向のあるタツノコにスタッフが目を光らせるなどで対策している。

課題については、開始当時から改善されていない、支援を受けていないピュアなひきこもり当事者の方の参加がほとんどなく、本来の事業コンセプトを達成できていないことである。ただ、北部ユースプラザで横浜北部 4 区で行ったセミナー相談会に参加した保護者や、保護者から情報を得た当事者からの申し込みがあった。結果的にはキャンセルとなってしまったが、北部ユースプラザ (支援機関) には行けないが、汽水になら行ってみたいというニーズの確認ができたと思う。今後、ZOOM 等の間接的な対面を経て、汽水に参加する等、新たなチャンネル、新たなアイデアを模索していきたい。

※北部ユースプラザとは事業を完全に分けており、ユースプラザでの予約受付をしない、スタッフから直接の促しはし

ないことをルールとし、自己責任で参加してもらう形式にしている。

【有給職業体験バイターン】

働くことに強い不安を抱え、アルバイトにさえ就けない生徒が、様々な理由で、高卒就職を選択せざるをえない状況がある。平等な競争を求められる就職協定から切り離れた福祉的マッチングを必要としている生徒が一定数いる。このような生徒が、通常の進路指導及び就職活動では成果が出せず、進路未決定からひきこもり等に陥るリスクが極めて高い。よって、在学中からの“安心できる大人”のいるアルバイト先を紹介し、働くための基礎体力をつけ、一般の就職活動をしてもらうか、そのままアルバイト先での就職を目指すことを目的とした事業。2019年度からは北部ユースプラザ利用者も参加可能になっている。

実施校：神奈川県立田奈高校、神奈川県立大和東高校

連携団体：一般社団法人インクルージョンネットかながわ（無料職業紹介）

事業実績

田奈高校：3年生男子1名（バイターン→一般就職）

1年生女子1名（バイターン調整中にコロナ）

北部ユースプラザ

Sさん（バイターン見学から本番の手前で怪我）

Sさん（バイターン見学）

Kさん（バイターン見学）

Tさん（バイターン見学）

有給職業体験バイターンの事業総括

ここ数年の学校連携事業の傾向として、ケースの困難度が高く、学校（2nd プレイス）や家（1st プレイス）の中でどう過ごすかが相談のテーマになり、アルバイトのような3rd プレイスに出ていくことができないタイプと、アルバイトはしっかりできているが、学校への定着が薄いタイプの両極端に分かれているため、あまりバイターン利用のケースが出ない年が続いている。

これもカフェ事業で述べたように、学校と当法人の関係が希薄になってきており、教員からの依頼が減っている、つまり教員が手札としてバイターン持っていない、知られてなさが要因でもあると考えられるため、わかりやすく開拓企業名について、求人票のような形で教員が閲覧できるものなど、工夫を進めて行きたい。

ただ、数的な実績が残せたことだけが若者支援ではないということもお伝えしておきたい。「バイターンというものがあるが参加してみないか？」という促しに対する反応も見立てになるし、働くことに対する不安をここから引き出すことも可能になり、その結果、今回

はよしておこうや、自分で探してみるという実績に残らないアクションが起きていたりする。そのようなことは本年度も多々あったように思う。

また、本年度から北部ユースプラザを利用する若者にもバイターンを利用してもらえるようになった。就労に不安があるものの、就労の意欲はあるという若者からのニーズは強く、希望が上がってきてはいるものの、開拓企業が少なく、なかなかマッチングにまでは至っていないというのが実情だ。そんな中でも、見学だけで有給雇用には発展していないが、上記のように、支援のカードとしてバイターンを持っていることは大きな意味があることだと思う。

予想以上に、新規雇用スタッフからもバイターンへの期待が高く、具体的な職業マッチング支援ができる機会として、スタッフの職業興味的モチベーションが高く、同行希望や、進んで担当になるなどが嬉しかった。

今後は、対応可能なスタッフの育成をし、北部エリアを中心に開拓を進めていきつつ、開拓企業との関係維持にも力を入れていきたいと思う。

【よこはま北部ユースプラザ】（横浜市補助事業）

不登校、ひきこもりなどの思春期・青年期の総合相談や自立に向けた若者の居場所の運営をするほか、地域で若者の支援活動を行っているNPO法人等の団体や区との連携を図り、地域に密着した活動を行うことを目的として、横浜市が設置し、NPO法人等が運営する施設です。対象は、都筑区、青葉区、港北区、緑区の北部エリア4区を中心に市内在住の15歳から39歳までの若者とそのご家族。常に5名体制で運営し、事業内容は横浜市の仕様に則った以下に加え、独自にバイターンや、高校への出張相談事業を加えている。

総合相談（電話相談、来所相談、家庭訪問等）

区役所におけるひきこもり等の困難を抱える若者の専門相談の実施

ひきこもりからの回復期にある若者の居場所の運営

社会体験・就労体験のプログラムの実施

地域の関係支援機関、区役所との連携及び地域ネットワークづくり

応援パートナーの養成・派遣

よこはま北部ユースプラザ実績

開所日数：274日

利用者数：延べ4,458名（本人146名、保護者48名）

新規来所者（見学のみ・保護者のみ含む）は120名（男62名、女58名：本人性別にてカウント）

うち85名が新規登録者（保護者含む）

応援パートナー：延べ23名（個人登録11名、団体登録2団体）

応援パートナー実施回数：29回

関連機関からの訪問者（219名）を含む、入館者数は延べ4,677名。

利用者数の中には電話相談のみの方も含まれる。

よこはま北部ユースプラザ事業総括

詳細な報告は、施設長の織田が丁寧にまとめた添付の『よこはま北部ユースプラザ 2019年度事業実績報告書』をごゆっくりと参照していただきたい。ここでは、法人全体から見たユースプラザ開始による法人への影響について報告してみたい。

契約期間が5年間ある、北部ユースプラザ（以下北プラ）に当法人が採択されたことは、当法人が横浜の北部エリアに根を張り、活動していく拠点ができたということだと考えている。これまでより、責任を持って地域の方々と、胸を張ったお付き合いができるようになったことに喜びを感じている。それと共に、これまで遣ってきた「地域」という言葉の意味や、コミットの度合いなども変わっていくのは、自然な成り行きだろうと覚悟を持って受け

止めている。

北プラの事業内容には、「地域の関係支援機関、区役所との連携及び地域ネットワークづくり」が含まれており、すでに、多くの行政セクションや民間支援機関の担当者を招いた地域連絡会を3回開催し、研修会も2回行っており、顔の見える関係づくりが可能になっている。また、「区役所におけるひきこもり等の困難を抱える若者の専門相談」も行っており、月2回各区に法人スタッフが出張し相談を行うことで、各区との関係も密接なものとなっており、地域で支援行うキーパーソンたちに当法人を認識していただけた1年だったという実感を持っている。

また、何と言っても、私たちと北プラを利用してる若者との信頼関係が構築できた1年だったと思う。私たちは、前法人及び、多くの支援機関で使われている「利用者」という言葉を止め、北プラを利用する「メンバー」という呼び方に変えた。これは、支援をする、受けるという上意下達的な場ではなく、スタッフも若者も、居場所に集うメンバーであるという、サードプレイスのフラット感を意識したものである。

そして、居場所にWi-Fiを飛ばし、メンバーが自由に使えるものとし、写真も断り許可を得られれば撮っても良いことにした。これらは、メンバーたちに大いに受け入れられた。また、居場所だけを利用し、相談を拒否していたメンバー（なぜ居場所にいるのかわからない人）たちも、必ず面談をするルールとして、自分の抱えている課題に向き合い、居場所を利用する意味を確かめるようになった。象徴的だったことは、いつでも調子が悪かったら眠ることができる敷きっぱなしの布団を撤去し、そこに卓球台が設置され、メンバーたちは汗だくになって卓球に興じている。

一言で言えば、パノラマが運営法人になり、居場所に風が吹き始めたと感じている。そんな風通しの良い縁側のような居場所に、北部ユースプラザをしていきたいと思う。

以上